ヘアスタイル。かつてそれは社会の枠の中に明確に存在していた。だから、自分のヘアスタイルは社会から一方的に決められ、その枠を破って自由に決めることはできなかったのである。その結果、ヘアスタイルを見ればどんな人物か了解することができた。

さて、現代は茶髪すら当たり前となり、髪の長さや色、さらには形まで、制約がなくなったといわれる。しかし、男性の銀行員がヒゲを伸ばし、髪を長くして後ろで一つに束ねているとしたら、おそらく銀行員らしくないと思い、非難する人さえいるに違いない。自由の一方で、いまだにヘアスタイルに対してステロタイプな見方や考え方が残っているようだ。

同様に、「坊主」「ハゲ」、あるいはヘアスタイルとは言い難いが、「毛の薄さ」に対する見方はどうだろうか。「ポジティブハゲ」と言った言葉があるように、マイナス一辺倒でない多様性をもっているのだろうか。そこで、自らのヘアスタイルを自分自身で選んで写真のようなヘアスタイルを作られているお二人に「髪」について語っていただいた。

対談

ヘアスタイルはマイスタイル 髪をめぐって

金子勝昭 × 半田まゆみ

パフォーマンスから入る

金子 最初は、剃ったというより、丸坊主にしたんですけれども、昔の言葉でいうと一厘（＝0.3㎜）刈りです。三十八歳だったかな。ある時期から人にからかわれるというか、たとえばスナックへ行ったときに片隅にいると、あら、金子さんがくると明るくなるわねなんていうことで、髪の毛が薄くなることに気がついたんですよ（笑）。　いまの若い男性みたいに自分のヘアケアをしていませんから、禿げるなんて思いも寄らなかった。おやじはもう死んでいましたがハゲの家系じゃなかったものですからね。あるとき人にいわれて気がつくと、額が広くなっているということだったんです。

丸坊主にしたきっかけは、勤務先の出版社で演劇部をつくって公演したときなんです。役としての必然性はなかったんですが、みんなをちょっと驚かせてやろうということもあって、一回だけの公演ですけど、本番の直前になって会社の近所の床屋に行って、とにかく一番短い丸刈りにしてくれと言ったんです。そうしたら、ほんとうにいいんですか、いい

金子勝昭（かねこ・かつあき）著述業
1930年生まれ。東京都立大学人文学部卒
1953年文藝春秋新社入社。文藝春秋、オール読物、週刊文春などの編集部、出版局の編集者を経て、編集委員、1990年定年退職。
現在、思想の科学研究会、現代風俗研究会、日本顔学会、大衆文学研究会会員。主な著書『片想い文明論』『ハゲの哲学』、『中年に何ができるか』『歴史としての文芸春秋―増補「菊池寛の時代」』、『正しい頭の禿げ方』ほか。

んですかと何回も言われたことが記憶に残っています。そして本番に出たんです。妻も見にきていたんですけれども、坊主のかつらをかぶっていたと思ったらしい（笑）。

もともと毛が多くて削ぐことがふつうだったんです。だから、また伸ばすつもりでいたんですよ。あとから考えてみると、いつの間にか梳き鋏を使わなくなっていた。

編集部　まわりの評価はいかがでしたか。

金子　会社の若い女性はカッコいいというんですよ。そのころはちょうどヒッピーが現れて、長髪が流行する時代です。でもね、四十代、五十代の女性は兵隊のイメージがまだそのころはあるわけです。それから刑務所。そういうイメージを反映して、いやだというか、反感を示すんです。だけど、ぼくは若い女性たちの評価を採って、そのままになっちゃったわけですよ。

そして一年後にひげを伸ばしはじめたんです。一つはサラリーマンがミスをすると謝って坊主になるということが多いでしょう。それと、宗教関係で剃ったのか聞かれることもあるので、そういうイメージを修正しようというわけでね

そのときから、人の反応を知ることによって、髪の毛や禿げに興味を持ち、いろいろと資料も集めたりして、哲学することになったといういきさつなんです。

編集部　先に行動ありきですか。

金子　そうですね。面白半分に丸坊主になったということが、一つのキーポイントだと思うんです。愛川欽也さんなんかも二十年くらい前かな、ぼくも薄くなってきたから五十歳を越えたら丸坊主にするよなんて言ったけれども、やっぱり一線を越えるということが難しいんですね。自分も薄くなったからあなたみたいに剃ってしまいたいという人はいるんだけれども、ぼくの知っている人で実行した人はいませんね。ぼくはなんでもなくひょっと越えちゃったんだけれども……。

生やすのと違って、いつでも剃ろうと思えば剃れるんですから。だから、日常の行動でもそういうことがおそらくあり得るでしょうね。端から見れば思い切った行動でも、本人は無意識だったり、軽い気持ちだったりすることが。その違いは何なのか。要するにおまえは変な人ということになっちゃうのかも。

半田　いまはご自分で剃っていらっしゃるんですか。

金子　十日に一ぺんくらい床屋に行っていたんです。十年ほど前から、入浴したときに自分で剃るようになりました。

半田　だいたい私も一緒のペースですね。私の場合は一九九一年に初めて剃りました。

半田まゆみ（はんだ・まゆみ）
学校法人阪神専修学園・阪神理容美容専修学校理事長
1962年生まれ　関西学院大学法学部卒業
美容師免許取得後、現代美術とヘアの融合について発表。1991年　カナダ、アメリカで髪を剃るヘアパフォーマンス。
大学にて『非言語コミュニケーション論』『服飾文化史』、中国・大連女子職業学校美容科にて講師を歴任。「文化としてのヘアメディア論」を発表。
著書に『丸刈り奮戦中』（たま出版）がある。

私は美容師の資格を取っているんですけれども、最初、普通どおりに美容の仕事をしていましたが、なにかもっともっと面白いことをしなければと思って自分なりに見つけた方向がアートとして文化として表現することです。

一九九一年の剃ったときに関わったネイティブアメリカンの人たちの髪の毛がどうして長いんだとか、そういうことをずっと調べていまして、彼らが髪の毛に対してでも素晴らしい文化をもっているのに気がついた。

髪の毛はスピリチュアル

日本でも髪は女の命といわれますけど、彼らネイティブアメリカンも同様に髪の毛はすごくスピリチュアルなものと考えているじゃないかと思い、それでは私は自分の女の命といわれている髪の毛を捧げましょうということで、全部剃るというパフォーマンスを一九九一年にカナダですると発表したんです。最初、それを言ったとき、周りがたいへんな騒ぎになりましてね。いまでこそモデルさんとかタレントが丸刈りふうなスタイルがありますけれども、そのときまだなかったので、恥ずかしいよ、道歩けなくなるよからはじまって、変な宗教に入ったのと違うかとまで言われますし、『丸刈り奮戦中』にも書きましたけれども、うちの父はもう娘ではない、と勘当にもなりますし、さんざんな思いで単身カナダのインディアンたちのところに行ったんですよ。そうしたら、彼らは気持ちを表す、意思を表現するのに髪の毛を切ることはよくあることだから、なんにも不思議じゃないよと、それはすんなりいったんです。

そのあとアメリカで、こんどは半田まゆみに頭を剃ってほしいという人が現れて、結局戻ってきてからマスコミの取材に会い、ひとつのトレードマークみたいな感じになって、ずっと続けているんです。

最初は全部剃ったんですけれども、全くないのどいまみたいにちょっとあるのと違うんですよ。

金子　それは違いますよ、五ミリ伸びていても違います。頭をぶつけたときに、血が出るか出ないかの違いがありますよ（笑）。

半田　そうなんです。全然違って、私も何回か撮影のために全部剃ってくださいということがあったので、そういうときは剃ったんですけれども、理容店で剃ってくださいというといやがられるんです。実際かみそり負けみたいに血が出たり、荒れたり、すごいんですよ。それ以来私はいつも三ミリのバリカンで

かつらで変身した金子さん(40代後半)

刈ってくださいということで、がーっと刈ってもらうのをずっと続けています。私はだいたい三ミリで十日に一回くらいです。一九九一年から私はずーっとこのスタイルなんですよ。

金子　もう十年近くですね。

ヘアスタイルを変えると服まで変わる?

金子　自分のスタイルが定着するまでに、迷いはありました。十年くらいかかっているかな。坊主頭は異装ということになりますが、それまでのぼくは、ダークスーツに、夏でも長袖の白いシャツしか着なかった。ネクタイもほとんど変えないような、おしゃれじゃないことを気取る、昔のバンカラスタイルだったんです。ところが、取材先のワシントン靴店の若社長から、「おしゃれで丸坊主にしたんですか」と聞かれたんです。この一言が僕の未来を決めたと思います。

つまり、坊主頭をトータルファッションとして考えなければならない、ということですね。お金の問題もあって、すぐに服装をぜんぶ取り替えるわけにはいかず、最初はちぐはぐで、上着はおしゃれになっても、まだズボンは以前のままというようなことを続けた揚げ句、なんとなく落ちつくのに十年くらいかかったでしょうかね。

そのころから会社の若い女性をはじめとして、食事に誘ったりするようになると、プレゼントをもらうことがある。それが自分だったら買わないようなセーターとかシャツなんです。ということはそれがぼくに似合うだろうということなんでしょうね。ちょっと恥ずかしいけれども、もらったからには一度は着てみなければならない。着てみると評判がいいということが度重なって、ぼくのファッションセンスが開発されてきたんです。

金いちおうサラリーマンという枠の中にはあったわけですけれども、比較的自由になった。

ひげで完成の金子さん(50過ぎ)

帽子のコレクションもたくさん(50過ぎ)

つまり、取材に行くときなどを別にしては、カジュアルなスタイルになった。それがまた、自分の気持ちをリラックスさせ、意識が変ってゆく。自分のアイデンティティをアフターファイブの世界に求めるようになっていったんです。

半田　あ、そうか、なるほど。

バンクーバー島にて初めて剃る(1991)

金子　それまでは会社人間だったんですよ。女性の側に付いたということが、ぼくの人生を大きく変え、かつ楽しいものにしたと思いますね。

　最初は一種のパフォーマンスとして坊主頭になったようなもので、そのときは哲学というか、フィロソフィがあるわけじゃない。冗談半分というか遊びでやったわけですからね。しかし、人生には遊びの気分も必要ですね。パフォーマンスにはそういう一面がある。それが芸術の要素でもあるんでしょうけれども。

ファッションの幅が広がる?狭まる?

半田　私の場合は、きっかけは一時的なパフォーマンスで、あとは伸ばそうと思っていたんです。私が慣れてきたのは十年もかからなくて、二、三か月くらいでしょうか。最初は違和感はありましたよ。アメリカで剃って、アメリカは人がなにをしようがかまわない国じゃないですか。そこに一か月くらいいました。その後日本に帰ってくると、やっぱり日本では最初じろじろ見られるんです。そこからわりと帽子をかぶるようになったんですけれども、最初の二、三か月は自分で鏡を見ても、びったりきてなかったかもしれませんね。

　でも逆に、いまはこのスタイルにしてからものすごく自分らしく生きられるようになったし、このヘアスタイルにそれこそライフスタイルまで出てきたんじゃないかなと思うくらい、楽になりましたね。

金子　これで一つのアイデンティティが確立したということですね。

半田　そうですね。だから、いまのスタイルになってからファッションがだいぶ変わりましたね。もともとそんなフェミニンな服を着るタイプではなかったんですけれども、絶対似合わなくなったのが花柄。花柄のブラウスとかそういうのはまったく似合わないし、ふわふわふわとしたイメージのものなども、だめですね。だからわりと黒。もともとはっきりした色が好きなんですけれども、モノトーンとかでないと、頭とのバランスがだめなんですね。

金子　乙女チックなものはだめなんですね。

半田　だめなんですよ。

編集部　金子さんは逆に幅が広がったんですね。

金子　広がったんです。素人のパンクロック・バンドに参加するようにもなったし。でも、どちらかというとそれは女の世界ですね。女性に引きずられるようにして、活動分野が広がっていきました。女のほうが勇気があるから。方向性が半田さんとちょうど入れ代わっているのかもしれませんね。

半田　そうですね。私なんか逆にアクセサリーとかイヤリングでも、使えなくなったものがあります。かわいいデザインのものはよく友だちにあげました。

金子　ぼくはファッション・リングをはめるようになったし、ブレスレットとかイヤリングを持ち歩くようになりました。二、三十年前だとやっぱり変な人に見えたでしょうね。

半田　ふだんはやっぱりお帽子をかぶっていらっしゃいます?

金子　帽子は必需品ですね。

半田　必需品ですよね、私も必需品です。

金子　帽子はいろいろと持つようになりました。

半田　私もそうです。帽子のコレクションはよくいただいたりするし、自分でも買う。

金子　もうちょっと帽子が流行るといいんですけれども、おしゃれとしては楽しいですよ。男はネクタイくらいしか変えるものがないのでね。

半田　頭が寒いですよね。

金子　だけどどちらかというと夏のほうがつらいんですよ。

半田　それも一緒です。夏は喫茶店でクーラーが直撃するんですよ。夏、電車の中はむしろ帽子をかぶっていたほうがからだにはいいんですよ。それと風の方向がすごくよくわかるんです。

金子　それから雨が降ってくると、人よりも早くにわかるとかね（笑）。

かつら、丸坊主と社会

半田　金子さんはお遊びみたいなことでかつらをかぶられるときはあるんですか。

金子　すっぽりかぶるかつらを三つくらい持っています。以前はたとえば同窓会のときにちょっとかぶって行っておどろかせたりしたんです。いまは丸坊主が売り物になったので、ほとんど使わなくなりましたね。

半田　私も遊びでかつらをかぶるのはわりと好きなんです。金髪とか茶色とか、いろいろ持っているんですよ。仮装パーティーっぽいときだけかぶるんですけれども、かぶったらかぶっているときの自分も好きなんです。でも、いちばん恥ずかしいのは、その脱いだ瞬間。その瞬間は絶対だれにも見られたくないですね。あれなんでしょうね。

金子　あれは下着の着脱と同じで、人に見られるのがとてもちょっと恥ずかしい。

半田　私もそれかなと思う。ほんと男の人の前で全裸になるというか、ほんとうに下着まで脱ぐような感触というのかな。ここだけは見られたくないというところまで見せてしまうような。

金子　そういう意味では頭も恥部なのかな（笑）。禿げもヘアスタイルだという観点からいうと恥部であっては困るんだれど。

編集部　かぶったとたんに恥部になるということなんでしょうね。

金子　やっぱり隠しどころになっちゃうんですね。だからパンティなんかと同じように、付けたり脱いだりするとそこに意識を集中させることになる。やっぱりとても恥ずかしいです。

半田　私もそうです。それどちょっと伸びてきたとき、よけい恥ずかしいですね。ちゃんと身だしなみをしてないみたいな意識で。

金子　ちゃんとひげを剃っていない、不精ひげという感じなんですかね。

半田　そんな感じです。

金子　お化粧していない顔を見せる、という意識なんでしょうかね。

半田　お化粧といえば、ファッションで花柄が着られなくなったのと一緒で、なるべく人前に出るときはちゃんとお化粧をしたり、ネイルも塗ったりしないと、尼さんにみられちゃう。それと震災のときにお風呂屋さんしか行けなくてお風呂屋さんへ行ったとき、私は背が低いですから番台を通ったら、震災のときだからメイクはしていないじゃないですか。ふつうの格好でいったら、よく、あ、男の子かと思ったと言われるんです。それはときどき困りますね。これにしてからは知らないお風呂屋さんにいくのも嫌だし、それから歯医者さん。寝て治療するとここだけがクローズアップされるわけでしょう。私がなぜ剃っているのかを知らない歯医者さんのところにいくのは嫌だという意識が、いつもどこかにありますね。

金子　言葉に出して聞かれないまでも、なにか詮索されている感じがいやなんですよ。

半田　内科のお医者さんでもそうですけれども、職業と関係なしのところで、ぱっと帽子をとって初めての人に会わないといけないというのは、ちょっと嫌というか、いちいちどう思われるのかなとか、ありますね。

金子　取材にいったとき、財界人とか年配の人は、心のなかでどう思っているか知らないけれども、自然に応対してくれます。若い人のほうが、なにか聞きたそうな、こういう格好はやっぱり胡散臭いと思っているような感じがありますね。被害妄想かもしれないんだけれども。だから、ヘアスタイル、姿かたちはやっぱり一つの記号だなと思います。たとえば女の人が髪を切ることは一つの意

味をもつわけです。文化によっても違うから、アメリカにいけばまた違った意味をもつでしょうし、こちらが説明しないかぎり、勝手に判断され納得されてしまうわけです。男の場合だったら中学生、高校生の丸坊主の規制というのがあるし、歴史的に言えば明治維新のときのちょんまげを切れという政策とか、あるいは中国の清時代に弁髪にしないといのちにかかわるほどだった。そういう規制はないほうがいいわけで、なくなりつつあるといっても、まだそういうものがどこかに残っている。風俗習慣にたいする意識は保守的ですからね。

半田　中学生とか高校生が丸刈りが嫌だと校則に反発するのがあるじゃないですか。いつも思うんですけれども、もし、私がいま女子中学生でこんな頭をするといったら学校側はどう対処するのか。女子だから反発過ぎてだめみたいな、逆の規制はあるのかなとかね。

金子　それはあり得るでしょうね。

半田　入社試験を私が受けた場合に落とされるのかどうなのか。

金子　そのスタイルでは受け付け嬢には向かないとかいうことはあるかもしれませんね。だけど男の丸刈り規制に反対して女子生徒がみんな丸刈りになったら面白いでしょうね、絵にもなるし。マスコミが喜ぶんじゃありませんか。

丸刈りが美だ

半田　でも、中国ではいまだにうわっと見られますね。美容学校の学生を連れていくと、

マンハッタン計画の原子物理学者Mr.Bern Porterより髪をもらう

みんな髪の毛をいろいろな色に染めていますでしょう。私が先頭に立って、そういう子らが五人くらい後ろにずらーっといると、もうみんなうわーっと見ていて、こういう女性でこういうふうなのは見たことがないと言われますね。女性の丸刈りは「GIジェーン」で、男性と同等に軍隊式のでやっていくシーンがあったり、ディズニーの「ムーラン」のキャッチコピーに、彼女は髪を切って戦士になったとかいうのがあります。いまの若い人はそういう女性がかっこいいみたいなイメージをもっているみたいですね。

金子　「スタートレック」の映画版で、頭髪がないというデルタ星人の、スキンヘッドのものすごい美人が出てきたことがありましたね。それは未来的な美を示す存在で、見た人は素敵だと思ったに違いないですね。いまは女性もストレスとか環境問題で禿げる人が多くなってきている。禿げが多くなっていくと逆転して、毛のある人のほうがむさ苦しいとか、古いということになるかもしれないですね、二十一世紀には。

編集部　未来美人でヘアレスな方というのはけっこう出てくるでしょうね。「スタートレック」ではパーシス・カンバータという女優が丸刈りになったんです。その方はミスユニバースのインド代表にもなったきれいな方でしたね。シガニー・ウィバーも「エイリアン3」で頭を丸めて戦っていましたね。性別がどっちともつかなくなったときの美的表現の一つとしてはよく出てくる。

半田　それはあるかもしれませんね。私なん

かもそれをいわれると、そういう感覚はなにかあります。気性もあるのでしょうけれども、あんまり女おんなとしては見られていないな。中性的な、かといって男性的でもない。でも、完全な女性でもないみたいな感覚で見られているところはね。でも、女性からはかっこいいと言われます。

金子　男から見てもかっこいいですよ。

ヒゲの美学

編集部　頭を剃られてすぐひげを生やされたんですね。

金子　一年くらい経ってからです。そして十年くらい前に顎鬚が白くなってきたので剃り落としてしまいました。ひげはまた生やそうと思えば生えてくるし、白ければ白いでまたよいのかもしれませんね。

編集部　エッセイで浅田次郎さんが頭が薄くなってきた自分の姿を鏡を見て、瞬間にひげを生やすことを決意して、帽子を買いに行った。即断即決であったと書かれましたね。

金子　浅田さんもかなり薄くなっていますね。

編集部　そう書かれていたので、なにか電撃的にそういうひらめきがきてひげでも生やされるのかなと思いました。

金子　顔面の毛の総量は一定だというような感じってあるのかな。でも頭の毛の薄い人は、体毛のほうが濃いという傾向があるようですね。いまは胸毛などは流行らないでしょう。男もむだ毛を取るなんていうことも……。

編集部　胸や足は一生懸命、取るんです。

金子　それを頭へ持ってくるようなことができればいいんでしょうけれども。

半田　得したなどというのはないですか。私なんか変に見られるというより、このごろ得しているなと思うのは、一回会ったら覚えてくださる。私が忘れていても向こうは絶対覚えてくれている。

金子　それはそうですね。だから、町で声を掛けられてこっちがなかなか思い出せなくて、困るということがある。

半田　そういう意味ではパーティでもぱっと目立ってしまったり。

金子　目立つから悪いことはできない(笑)。でも、もう少し目立つ人が多くなってほしいな。とくに人の名を覚えなければならない仕事の場合だと、それぞれ違ったスタイルをしてくれるとこちらも覚えやすいんですが。女の人はそれなりに髪型も違うし、服装も違うんだけれども、サラリーマンの場合、顔つきもファッションも似た感じの人が多い。だから、禿げとかひげは、識別するためには非常に助かるんですよ。会社勤めであっても、服装などを含めて、もっと個性的なスタイルがとれるのじゃないか。出世指向があると、服装などに目につくものには自己規制がはたらく、ということもあるでしょう。でも、それ以前の問題として自分なりの表現をしたいと思う人が少ないということが、ほんとうは憂うべきことかもしれません。

髪の色を楽しむ

編集部　半田さんの学校の学生さんは職業柄かなり自由だと思いますけれども、それと中身の個性とヘアスタイルなどマッチングは、いかがですか。

半田　やっぱりマッチングってあると思うんですよ。この四月に出るうちの入学案内にそれを書くんです。その人の生き方とか考え方がヘアスタイルにも表れているということで、

Mr.John Held Jr.の頭を剃るパフォーマンス(1991　ダラスにて)

朝はレッド、夜は黒
時代の無意識を染め直す。

半田さゆみ　HAIR ART通信

ウーマン
WOMAN

一番だしは!

産経新聞に連載中の「Hair Art通信」

入学案内にうたうんですけれども、必ずそれってあると思いますし、そのことをもっとわきまえた人になってほしい。

ヘアカラーが流行っていますけれども、色をどんどん変えていける時代です。うちの学生でも現に一人、学校にきているときは真っ赤な男の子がいるんです。飲食店にアルバイトに行っているときは、わざわざ黒のスプレーをかけて行くんです。黒のスプレーを大量に使わないといけないから、それにお金がかかっている。それなのに、それはもったいないと思わないで、翌朝はシャワーを浴びて真っ赤にしてくる。それだったら最初から黒にしたらいいのにと思うんだけれども、違うんですよ。だから、それはちゃんと飲食店だから黒にしないといけないと自分でもわきまえているし、そういうふうな変化をもっともっとできる人になんていってくれたらいいと思いますし、髪の毛ってそういうふうに変わっていけばいいんじゃないかなと思うんですよ。

金子　髪の毛が傷みませんか。

半田　あまりそれはいまの若い人は気にしていないみたいですし、黒に戻すじゃなくて、黒に変えるみたいな感覚をもっているなと思うんです。

編集部　まったくそうですね。ポーラ文化研究所で三年に一回高校生から六十五歳までの女性を対象に実施している調査「おしゃれ白

書」があるんです。そのなかに、染毛とか髪の毛についての意識を聞いている項目がありまして、一昨年の秋の結論は「黒も選択肢の一つ」だったんです。

金子　日本人の髪が黒いのはいい面もあるけれども、そうでない面もありますね。コンサートの会場などでうしろから見て真っ黒な頭が並んでいると不気味な感じでしょう。夜の新宿なんかで横町からぞろぞろと、みんな黒い髪で黒っぽい服装が出てくると、国際的に見れば異様な感じだということになるでしょうね。だから、白髪とか禿げが混じっていると、バラエティに富んでいるし、人間的な、暖かみを感じますよ。

編集部　学生さんを見ているとかなり皆さん個性的で、生き生きしている感じですね。

半田　個性的です。毎日ヘアスタイルを変えてきますからね。毎日服を変えるのと一緒に、ヘアアレンジも毎日変える。うちの学生に聞いてみると、髪の毛を決めてからそれに合う服を選んで朝出てくると言いますからね。へえ、難しいなと思うんですけれども、そういうふうにして楽しんでいるみたいですね。

選択肢の少ない中高年と理髪業

金子　毎日髪の毛の色を変えて楽しむ若い人たちが出てきたけれども、彼ら、彼女たちが年をとってもそんなに変わらないでいくんでしょうかね。ビジネスマンの社会を見ていると、元気のいい学生が入ってきても、だんだん会社の色に染まってしまい、結局何年経ってもビジネス社会はあんまり変わらない。考え方とかファッションも、結局は昔からのものを受け継いで変化しない。ピーコック革命と言われてから二、三十年経つけれども、中高年の人たちはあまり変わっていないでしょう。

編集部　両極でスーツか、ゴルフウエアかなんですよ。なにか中間のものがない。

金子　ところで、床屋さんへ行くとどこにかく禿げとか毛が薄いということばは禁句で、タブーだというんです。それではだめですね、気にはなっているけれども口には出しにくい髪の毛の相談ができる、そういう利用者との関係をもたないのは、理容師の怠慢でもあると思うんです。

半田　そうなんですよ、たしかにそれは私たちの業界の問題で、もっとアドバイザー的な役目の人がでてきてほしいというのはありますね。

金子　いまいちばん床屋へ行くのは中高年の男でしょう。白髪になったり、薄くなったり、毛の悩みがあるんだから、そういう人たちを積極的にアドバイスする立場にならないと、理容店に未来はないのじゃないでしょうか。

半田　うちにも理容科と美容科とあるんですけれども、理容科の入学生が極端に少ないんですよ。高校生にとってあまり人気のない職業で、逆に美容というのは人気があるんです。なにかなというと、理容というのは受け身なんですよ。「どうされます？」ってお客さんに聞くんですよ。デザインを提供する側にアーティストになっていないんです。美容院だとあなたにはこういうスタイルが似合います、あなたの髪質はこうですとリードして、引っ張っていってあげれるんですけれども、そのへんも理容の職業の問題点ではありますね。

金子　利用者もそういう意識がないから、「いままでどおりでいい」としか言えないんですよ。ほんとうはこうしたいと思っても、ちょっと照れくさい。後頭部を鏡で見せて、これ

でいいでしょうかと一応聞いてくれるんだけれども、あんまりよくわからないから「いいです」と言っちゃう。

編集部　だから、男性はたどえヘアをちょっと変えてもらっても、それに合う服の色やデザインはどうすればいいか、悩んでしまうと思うんですよ。そこまでアドバイスしてもらえれば本来はいちばんいい。お客さんにとって本来いちばん日常的に接しやすいポジションにいると思いますよ、理髪師は。彼らがファッションのトータルアドバイザーとして機能してくれたらたいへんありがたいと思うんです。

金子　床屋にも男性用のいろいろなセーターなりシャツなり、おしゃれなものが置いてあって、ヘアスタイルとあわせたりできるといいですね。コンピューターグラフィックスまでいかなくても。

禿げも個性の一つ

編集部　お二人ともヘアスタイル自身がライフスタイルになっているわけですね。

金子　髪の毛は必要なものだけれども、禿げることもまた自然なんですね。ぼくは禿げの初期の段階で、たまたま丸坊主になり、禿げもヘアスタイルの一種だという悟りに到達した。それによって、会社員としての地位は狭めたかもしれないけれど、それを補ってあまりある豊かな世界を生きることができた。一生の総決算としては、禿げてよかったと思いますよ。

いまでも取材されることがあるんですが、必ず「若禿げの人にハゲマシのことばを」と聞かれる(笑)。励ましのことばなんかありませんよ。意識の問題なんです。他人はなんとも思ってないのに、一人でうじうじ悩んでいるんですね。うじうじしていることが、マイナスをもたらすんです。

禿げを自分のスタイルにしてしまえばいいんです。ファッションや行動様式も変わってくる。それを楽しむゆとりがもてれば、魅力も出てくる。おしゃれで禿げになったのか、といわれるようになれば、しめたもんですよ。

半田　どんなヘアスタイルでもそうですけれども、否定的にとるのかどうかはやっぱりその人の考え方じゃないですか。禿げだからすごく後ろめたく感じる。それが一つの個性なんだ、特徴なんだと積極的に考えればよいのでは……。誰でもどこかに欠陥がある。たとえば太り過ぎている、背が低い、背が高過ぎるというのも一つだろうし、目が悪いとか風邪をひいているとかもそうだろう。そんなふうに考えると頭の毛が薄いのも一つのその人の特徴かもしれない。毛があってもくせ毛とか、襟足が上がって生えているのが嫌だとか言う。それをいかに自分のスタイルにもっていくかが大事ではないかと思っているんです。